

令和 6 年 6 月 24 日現在

機関番号：10101

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2021～2023

課題番号：21K00934

研究課題名（和文）コミュニティ・アクションの誕生 民衆的アーカイヴによる戦後福祉国家史の再検討

研究課題名（英文）The Birth of Community Actions Reassessing the History of British Welfare State in 1970s

研究代表者

長谷川 貴彦（HASEGAWA, TAKAHIKO）

北海道大学・文学研究院・教授

研究者番号：70291226

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、インナーシティ問題を背景として登場してくるコミュニティ・アクションを対象に、戦後イギリス史の分水嶺を形成する1970年代の状況を「下から」のアプローチによって解明しようとするものである。戦後史の研究は、同時代の資料公開が進むなかで本格的な歴史研究が試みられるようになっていくが、コミュニティ・アクションは戦後福祉国家史の転換点となるとともに、1970年代の転形期のアモルファスな社会意識を集約したものであり、それをオーラルヒストリーやエゴ・ドキュメントなどの民衆的アーカイヴを活用することにより明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、コミュニティ・アクションの活動家のオーラルヒストリーとエゴドキュメントを用いてロンドン・ノッティングヒル地域での運動の展開を史的にあとづけた。第一段階は1960-1970年代初頭の「抵抗型」の運動で、第二段階は1975年-1980年代にいたるもので、「提案型」の運動が展開された。後者の時期には、初期の運動の成果として開発計画が頓挫したあとに、政策の「真空地帯」が創出され、そこにコミュニティ・アクションの側が計画の構想と立案をおこなっていった。新自由主義下の地域活動として称揚されることもあるコミュニティ・アクションであるが、それが抱える課題に対しても歴史的展望を与えることができた。

研究成果の概要（英文）：Community action, centred on everyday issues affecting life at neighbourhood level, was a new form of political activism that flourished across urban Britain from the 1960s to the 1980s. Using individual narratives and testimonies, this project recovers part of the forgotten history of community action through a case study of Notting Hill area in London. During 1960s and 1970s in Notting Hill, the growth of community action was a response to the failure of traditional political organisations to represent those who disagreed with various aspects of urban policy. Over the 1970s, activists re-shaped policy on urban renewal, housing and transport. The Notting Hill experience shows how community activists pioneered new forms of urban policy and forged a partnership with local government.

研究分野：イギリス現代史

キーワード：サッチャリズム 1970年代 民衆的個人主義 エゴドキュメント コミュニティ・アクション

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

これまで戦後イギリス史を語る際には、ひとつの「常識」があった。戦後政治のコンセンサスであった「ゆりかごから墓場まで」をスローガンとする福祉国家が「英国病」とも言われた経済的衰退をもたらし、それを打開したのがマーガレット・サッチャーによる新自由主義的改革であったというものである。こうした歴史の語りは、サッチャーによって提出され、のちにトニー・ブレアによって強化されて、その後30年にわたるイギリスの政治的言説のなかに強固に組み込まれてきた。

しかし近年、この新自由主義の「成功物語」には、いくつかの疑問符が付けられるようになってきている。2008年のリーマンショック以降、新自由主義の「成功物語」は説得力を失いつつあり、現在の緊縮政策がもたらす社会的危機の起点となったのが、サッチャリズムの新自由主義的政策ではなかったのかと指弾されている。アメリカにおけるトランプ政権の成立、イギリスにおけるEU離脱は、実感として存在してきた「失敗」を裏書きするものとなっている。また、2017年9月に研究集会「イギリス新自由主義再考 Rethinking British Neoliberalism」がロンドン大学にて開催され、そこでは大胆な新自由主義解釈の試みが企てられた。

他方で、近年、資料の公開によって戦後イギリス史の再検討が急速に進展しつつある。そのなかでも焦点となっているのが1970年代である。そこでは、新自由主義の成功物語の中での否定的イメージに対する反証が提示されている (Lawrence Black, Hugh Pemberton and Pat Thane eds., *Reassessing 1970s Britain*, Manchester University Press, 2013)。歴史家のフローレンス・サトクリフ＝ブレイスウェイトは、戦後史を社会的階層秩序に基づく恭順 Deference関係の長期的衰退として捉え、「民衆的個人主義」 popular individualismと呼ばれる傾向の登場に注目している (Camillia Schofield et al, "Telling Stories about Post-war Britain: Popular Individualism and the 'Crisis' of the 1970s", *Twentieth Century British History*, vol.28, no.2, 2017)。

本研究は、この民衆的個人主義の具体的な発現としてコミュニティ・アクションをとらえる。ヴォランティアな活動は、福祉国家史のなかで言われてきた福祉複合体論を構造論的なものではなく、主体論として民衆史的に再構成することを意味している (Melanie Oppenheimer and Nicholas Deakin (eds.), *Beveridge and Voluntary Action in Britain and the Wider British World*, Manchester, 2011)。記憶や感情など行為主体の主観性にまで踏み込んで分析をする最近の主体論は、エゴ・ドキュメントを利用したアプローチを採用している (長谷川貴彦編『エゴ・ドキュメントの歴史学』岩波書店、2020年)。英国では、近年オーラルヒストリーなどの民衆的アーカイブの整備が急速に進められているが、それはかかる問題意識に基づくものである (Georgina Brewis, and Anjelica Finnegan, 'Archival Review: Volunteering England,' *Contemporary British History*, 26:1, 2012)。

2. 研究の目的

本研究は、インナーシティ問題を背景として登場してくるコミュニティ・アクション (地域社会事業) と呼ばれる運動を対象として、戦後イギリス史の分水嶺を形成する1970年代の状況を「下から」のアプローチによって明らかにしようとする。戦後史の研究は、同時代の資料公開が進むなかで本格的な歴史研究が試みられるようになってきている。コミュニティ・アクションは戦後福祉国家の分水嶺を形成するとともに、1970年代という転換期のアモルファスな社会意識を集約したもので

あり、それをオーラルヒストリーやエゴ・ドキュメントなどの民衆的アーカイヴを活用することにより明らかにしていきたい。

1970年代の危機は、とりわけインナーシティ問題として表出される。「インナーシティ」という概念は、1960年代アメリカ都市社会学に起源をもち、環大西洋レベルで流通してイギリスに流入して言語的・文化的構築されたのである。近年、インナーシティ問題に関する本格的な歴史研究を上梓したピーター・シェープリによれば、問題の背景には、戦後都市計画の破綻、産業の衰退、移民の増加、そして貧困の再発見にいたる社会調査活動などの要因が考えられるという(Peter Shapely, *Deprivation, State Interventions and Urban Communities in Britain, 1968–79*, Routledge, 2018)。「インナーシティ」とは「重複剥奪multiple deprivation」に苛まれている地域を指し、貧困地域特定のための指標として、所得、就労、健康、教育、住宅、アクセス、子どもの貧困などの多面的な項目をあげていた。

大衆消費社会の中での消費者意識が覚醒され、また市民の権利意識が先鋭化して、民衆的個人主義が成長して、インナーシティ問題に直面した地域では、コミュニティ・アクションと呼ばれる地域住民による問題解決のための主体的活動の領域が形成されていった。コミュニティ・アクションとは、単純化して定義すれば、それは1960–1980年代において都市部の社会活動に関する組織・方法を総称するもので、運動の争点となるのは、公営住宅、公園、史跡、公共交通、保育、成人教育など多岐にわたるものであった。運動参加者たちは、雑誌『コミュニティ・アクション』を発行して情報交換をおこない、当時台頭しつつあったフェミニズムや環境保護などの新しい社会運動と共鳴しながら拡大していった。

3. 研究の方法

本研究は、「民衆的個人主義」をキー概念に、コミュニティ・アクションを対象として1970年代における変容と再編の過程における社会意識(主観性)の変容を、オーラルヒストリーやエゴ・ドキュメントの成果による民衆的アーカイヴを駆使しながら、明らかにしようとした。

本研究では、コミュニティ・アクションによる住宅問題への取り組みの対象として、公営住宅をめぐる賃貸人の運動、ならびにホームレス対策のなかでの「家屋占拠」運動について取り上げることにした。コミュニティ・アクションを通じた公営住宅での運動は、スラムクリアランス区域で特に発展して、入居者の家族にはさまざまな権限が付与され、新築住宅のデザインの選考に関与し、入居者の選択をおこなうまでになった。さらに公営住宅での運動は組織化され、一部では住宅協同組合が設立されて、公営住宅内部における集合的活動、すなわち、家賃の集金、入居者の部屋の割り当て、そして活動に関する専門職助言者の指名などおこなった。

他方で、ホームレスの問題も深刻化していた。都市部における慢性的な住宅供給不足によって、家賃水準が上昇した。スラムクリアランスのために強制的に買上げられた住宅は、公共支出削減によって再開発計画が頓挫し、「空き家」の増加が目立つようになっていった。ホームレスの増加と空き家の増加という跛行的な事態の進行に対して、コミュニティ・アクションのひとつの形態としての「家屋占拠運動」*squatting* が活発化していった。「空き家」に対する占拠に対する歴史的評価は、民衆政治の自己防衛活動であり、共同体主義的な生活実践とされることもある。

史料となる「民衆的アーカイヴ」は、マイノリティや社会運動の参加者についてのオーラルヒストリーやエゴ・ドキュメントを指し、そのなかにはデジタルアーカイヴ化されたものも少なくない。英国図書館編の女性解放運動史に関するSisterhood and After およびより一般的なNational Life

Stories Collection、地方レベルでの移民のオーラルヒストリーのアーカイブなどが名高いものとなっている。またイギリスの州立文書館では、庶民の歴史に関連した史料を収集するようになっており、そこには大量のエゴ・ドキュメントが含まれている。

エゴ・ドキュメントとは、「一人称」で書かれた資料を示す歴史用語であり、あえて翻訳をすれば、「自己文書」や「私文書」などが試訳としてあてられている。具体的には、書簡・手紙、日記、旅行記、回想録、自叙伝、オーラル・ヒストリー、医療検診、警察調書、法廷審問、スクラップブック、写真・アルバム、唄、映画、自画像、さらにいえば、落書きまでも含めて考察の対象となっている。エゴ・ドキュメントに関しては、情報を提供してくれる史料として定量的かつ定性的に分析することで、従来の史料に欠落していた視座を提供するものとして読み解くアプローチがある。また、語りの主体が自己を構築していく過程を重視して、史料のフィクショナルな側面を脱構築し、さらに史料に照射される記憶や情動などの「主観性」の分析への視座も提示されようとしている。本研究は、こうした方法論的視座を踏まえての本格的な実証研究となる。

4 . 研究成果

本研究では、1960年代末から1970年代初頭にかけてロンドンのノッティングヒル地域で展開したコミュニティ・アクションを事例として、1970年代の民衆的個人主義の特質を把握しようとした。ノッティングヒルは、ロンドン西部に位置するインナーシティ問題に直面していた地域となる。ノッティングヒルでは、1958年に大規模な人種暴動を経験することになるが、その背後には「コミュニティの解体」という問題が存在しているとされ、早急なコミュニティの「再建」が求められていたのである。こうしてノッティングヒルでは、こうした問題に対処するためにさまざまなコミュニティ・アクションが展開されることになるが、それを指導したのは若い世代の活動家たちであった。

ジャン・オマリー (Jan O'Malley) は、ノッティングヒルでコミュニティ・アクションの活動家として活躍した。その活動の記録をまとめて1977年に刊行された『コミュニティ・アクションの政治』は、この地域の躍動的な運動の全容を伝えてくれる。いわば、活動のエゴ・ドキュメントとも言えるこの回想録的な書物に加えて、2011年に労働組合評議会 (Trade Union Council TUC) とのあいだでおこなわれたインタビュー (オーラル・ヒストリー) などをもとに、オマリーの思想と実践の特質について析出することにした。オマリーの言説の検討を通じて、ロンドン西部で展開した民衆的個人主義の不定形な存在様式をあきらかにしつつ、コミュニティ・アクションに内在したサッチャリズムへの反転の論理を見出すことも課題として設定した。

本研究では、こうしたコミュニティ・アクションの活動家のオーラルヒストリーとエゴドキュメントを用いて、ロンドン・ノッティングヒル地域における運動の歴史的展開を資料的にあつづけることができた。すなわち、コミュニティ・アクションの第一段階は、1960-1970年代初頭に展開した「抵抗型」の運動であり、第二段階は、1975-1980年代にいたるもので、「提案型」の運動が展開された。後者の時期には、初期の運動の成果として開発計画が頓挫したあとに、政策の「真空地帯」が創出され、そこにコミュニティ・アクションの側が計画の構想と立案をおこなっていった。新自由主義下において地域活動として称揚されることもあるコミュニティ・アクションであるが、それが抱える現実的課題に対しても歴史的展望を与えることができた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 長谷川貴彦	4. 巻 18
2. 論文標題 貧困と福祉の歴史学 イングランドの歴史的経験から	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 ジェンダー史学	6. 最初と最後の頁 5-16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 長谷川貴彦	4. 巻 440
2. 論文標題 現代イギリス史への視座「書評：小関隆著 『イギリス1960年代 ビートルズからサッチャーへ』（中公新書、2021年）を読み解く」	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 月刊東京	6. 最初と最後の頁 46-53
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 長谷川貴彦	4. 巻 43（7）
2. 論文標題 歴史学とポストモダン	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 現代思想	6. 最初と最後の頁 203-210
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 長谷川貴彦	4. 巻 66 - 1
2. 論文標題 グローバル・イーストの歴史学に向けて：高橋幸八郎のエゴ・ヒストリー	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 歴史と経済	6. 最初と最後の頁 22-26
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 長谷川貴彦	4. 巻 51-15
2. 論文標題 感情史のかたち	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 現代思想	6. 最初と最後の頁 36-45
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件 (うち招待講演 2件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 長谷川貴彦
2. 発表標題 「趣旨説明」 「サッチャリズムの歴史的前提：民衆的アーカイヴによる1970年代の再検討」
3. 学会等名 日本西洋史学会第72回大会 (東洋大学) 小シンポジウム
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 長谷川貴彦
2. 発表標題 「貧困」と「福祉」の歴史学 イギリス近現代史の経験から
3. 学会等名 ジェンダー史学会第18回年次大会シンポジウム「貧困とジェンダー 「公助」の役割を問う」 (招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 長谷川貴彦
2. 発表標題 資本主義論の現在：コメント現代歴史学の観点から
3. 学会等名 政治経済学・経済史学会 春季学術集会 (招待講演)
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計6件

1. 著者名 歴史学研究会編、長谷川貴彦	4. 発行年 2022年
2. 出版社 東京大学出版会	5. 総ページ数 304
3. 書名 『「歴史総合」をつむぐ：新しい歴史実践へのいざない』（担当：産業革命はなぜ「革命」と呼ばれるのか）	
1. 著者名 長谷川貴彦	4. 発行年 2021年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 326
3. 書名 『岩波講座 世界歴史』第1巻「世界史とは何か」（「現代歴史学と世界史認識」）	
1. 著者名 長谷川貴彦・大門正克編	4. 発行年 2022年
2. 出版社 日本経済評論社	5. 総ページ数 343
3. 書名 「生きること」の問い方 歴史の現場から	
1. 著者名 角松生史・長谷川貴彦ほか	4. 発行年 2022年
2. 出版社 日本評論社	5. 総ページ数 324
3. 書名 縮小社会における法的空間 ケアと包摂（担当：共著，範囲：第14章「コミュニティ・アクションの誕生 1970年代の危機と福祉国家」）	

1. 著者名 Q. Edward Wang , Okamoto Michihiro , Li Longguo, Hasegawa Takahiko	4. 発行年 2022年
2. 出版社 De Gruyter Oldenbourg	5. 総ページ数 657
3. 書名 Western Historiography in Asia Circulation, Critique and Comparison	

1. 著者名 成田龍一・小川幸司編、長谷川貴彦他著	4. 発行年 2022年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 363
3. 書名 世界史の考え方	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------